

# Weekly Bulletin 2022-2023

第2510地区  
Rotary INTERNATIONAL

札幌東口ロータリークラブ

5月11日(木) 第30号

第3046回 例会

本日の  
プログラム

空き家処分と活用の実例・不動産サイト「みんなの0円物件」によるマッチング

0円都市開発合同会社 代表社員 中村 領 氏

## 新会員卓話 佐藤博嗣 会員

私は昭和54年10月25日札幌生まれの43歳です。父母と姉と私の4人家族で育ちました。現在の家族構成は、妻と、子供2人、小学校4年生男子、小学校2年生女子です。税理士事務所開業7年目の年で、私含め3名でTKCシステムによる自計化支援を行っております。税理士になったきっかけは、大学時代に何か資格を取って仕事をしたいと考え、まず頭に浮かんだのが税理士でした。しかし、日商簿記の3級ですら理解できず、一時は諦め部活に現実逃避しておりました。就職活動は、札幌市の消防士を目指し公務員試験に挑戦しました。試験は合格しましたが、面接で落ち人生初の挫折を味わいました。しかし、公務員試験で勉強の面白さに気づき、改めて税理士を志し勉強を始めました。30歳から税理士事務所で働き始め33歳で合格、35歳で独立開業し現在に至ります。

次に、仕事の話です。税理士は税金の計算が主な仕事ですが、その前提となる会計が重要であると考えております。2年前TKC全国会の広報記事が日経新聞に連載され“歴史からひもとく会計の役割”という対談記事がありますのでご紹介します。

・『歴史に学ぶ会計三悪』世界の歴史を見たときに、破綻する国家や組織は会計三悪に当てはまります。①会計を怠る②会計を見ない③会計に不自然な操作を加えるが三悪です。こうした状態の国家や組織が繁栄を続けるのは難しいです。寛政の改革で松平定信は自藩の会計改革から始めました。隠していたお金の状況を明らかにすることで幕府の改革に乗り出せたそうです。会社の繁栄のためには会計を正しく行い、自分の状態を正確に把握することが大切です。

・『大阪商人が大切にしてきたこと』①始末(コスト管理)②才覚(アイデア)③算用(帳簿を付けること)です。井原西鶴の世間胸算用には、“万の事について帳面そこそこにして算用こまかにせぬ人、身を過るという事ひとりもなし”=帳簿をいい加減にしている人でまとも

に商売した人はいない。という言葉を残しております。

・『信用が大切と説く渋沢栄一の真意とは』“信用の厚い人になれ、それを心掛けよ、お金は信用の後についてくるものである。正しく生きて、世の中を信用しながらすすめなければ、事業を成功させるのは難しい”という事を渋沢栄一は考えていました。発展の基本は、嘘のないありのままの帳簿を活用し、会社の状態を冷静に把握することにあります。

・『福澤諭吉のもう一つのすゝめとは』福澤諭吉は帳合之法という本を出版しました。こちらは英語を翻訳した複式簿記の教科書で、武士に複式簿記を学ぶことをすすめていたそうです。学問といえば和歌や詩だという考え方から、帳簿の付け方をすすめることで、明治という激動の時代に、日本の経済力はこうして強くするという道を示しました。帳簿を付ける能力が日本を経済大国にしたのではないでしょうか。

・『ルイ14世恐怖の倒産防止法』当時のフランスは大不況で倒産が頻発したそうです。そこで、企業に健全な経営をさせるよう命令し、財務大臣は倒産防止法を作り、記帳義務を入れました。倒産状態になると、裁判所に帳簿を持っていきます。そこで帳簿が合っていれば自己破産を認め、正しい帳簿を持ってこない人は詐欺破産として死刑に処せられたそうです。こうした決意もありフランス経済は立ち直れたそうです。

・『商売繁盛の条件とは』500年前イタリアで出版された複式簿記の本に、真面目な簿記をしなさい。ごまかさず、事実の通り記録せよ、秩序をもって日々記帳をしなさい。と書かれております。帳簿は経営判断に不可欠であり、会社を強くするためのヒントが詰まっています。皆様も会計帳簿からさまざまな経営のヒントをつかみ、会社を繁栄させていただければ幸いです。



2022-23年度 国際ロータリーのテーマ

「イマジンロータリー」

国際ロータリー会長:ジェニファー・ジョーンズ

■本日のロータリーソング

君が代、四つのテスト

